あとがき的小詩論

向井　孝

1

▼　この詩集に入れたのはビラとしてつくった「表白文」を除くと、〈コスモス〉にのせたものばかりだ。コスモスの〈原稿〆切日〉がなく、さらに、ぼくがコスモスの〈同人〉でなかったら、これらの詩は、まあ出来なかったろう。

　といっても、年に三〜四回発行のコスモス。忘れた頃に受取って、たいていは「今号の詩、あまりパッとせんなぁ。みんな、こんなもんつくってどうするねん」などと読み過すぐらいのこと。

　云わばまあその程度でもある〈コスモスとの関係〉が、この詩集が出来るのに不可欠の、こよないものだったことに、いま気付いておどろいている。

2

▼　そのコスモスの同人ということ。六〜七年まえに「やめる」と秋山さんに申出たことがある。

　「もうここらへんで―まずお金を稼ぐために働いて、それから…といった―今までの暮し方をやめんと、死ぬまでやめられへん。その分の時間と労働を〈運動〉？　に向けて、自分が納得できる生き方で、おもしろおかしく運動を楽しもう。それで、喰えなくなったらその時や」―というわけで、そのとき30年来の「新日文」をも退会したのだが、つまり稼がぬ代りちょっとでも出費を抑えて…という理由からだった。

　ところが秋山さんから、「同人費のことなら、ぼくが出しとく。ともかくいい詩をコスモスに書いて下さい」と云われて、うわぁっと感激。それに甘えて同人に居直ったというわけである。

　となると、秋山さんに応える意味でも、「忙しいので欠稿…」と怠けるわけにはいかない。

3

▼　ところがぼくには、三・四ヶ月に一回発行のコスモスに出す詩一篇が、なかなかつくれない。だからつぎつぎに月一篇以上も、詩を発表するコスモス同人たちをみると、フシギな能力をもつ手品師のようにみえる。

もっとも、よく考えてみるとぼくも、月数篇の詩をかいたときがあったわけで、そのときどうだったかを思いだせば、多作？　のコツはおよそのところ判るはずだ。つまり—

第一に、そのころぼくはいつも「詩をつくろう」と、心をきょろきょろさせていた。半ば無意識に、それこそ「詩のタネ」をいつもさがしていた。

第二に、「詩のタネ」といっても、どこにもころがっているわけじゃなく、ちょっとしたコツがある。ぼくがタネをみつけるのは、自分の身の廻りの例えば「嘱目風景」だ。それに焦点をあてて、あ

まり構えず気軽に近づけば、近づくほどにタネはいくらでもある。（第三は、そのとり出したタネを、土にまき水をやり、日なたに出せば芽が出て葉がのびる。ぼくの場合早くて二日、長ければ十日ぐらいで、まあ大てい何とかなる）

—とすれば「詩がかけない」のならこの原点に戻ればよい。しかし問題はこの第一、第二がいまのぼくに通用するかである。

4

▼　ところで、このごろのぼくの日常は、来訪者や若い仲間との応接、郵便の整理、会合集会行事行動の準備と参加、機関紙やビラの原稿や版下かき、印刷と発送というもので毎日が終始する（と云うと、えらい忙しそうだが、たまには一、二時間パチンコをしたり…）で、ともかく当座のことに追われて、詩を考えるのに一～二日なんてゆとりは、なかなか出てこない。

もちろんコスモス原稿〆切りの十日前ぐらいになると、ああ、と何ども思い出す。そして許されるときは、当面の日常事を放り出し

て、詩をつくろうという気分になる。

5

▼　そこで第二の問題—詩のタネさがしが出てくるのだが、前述のようなぼくの日常の主な関心やいまの興味は、ぼくがみんなと一しょにやっている—反戦、反公害、反差別の—市民運動住民運動のなかにある。

たとえば—反原発とか救援とかの個別の四〜五種の運動にかゝわりながら、大げさにいえば、それらの運動の質をかえ、新しいやり方をみんなと実践的に創りだすことで、〈統一と団結〉的既成の体質を、〈自由連合〉的方向へとすゝめる（エライこっちゃ！）道をさし示す—ということだ。

だから、まるで他人事みたいな「嘱目風景」をとり出して、何とか詩をつくろうということが、もうどうしても出来ない。

そこで、せいぜい運動に関係のある身辺日常の事件や、うごきをとり出して、「情景的」にえがく、というのが昨今のぼくの詩である。

る。

だがそうなると、今度は情景になるような「事件」が、なかなかない。

6

▼　一方ぼくにとっては、ほとんど「詩」をつくるのとかわらぬ営為として、月にすくなくても二〜三篇は「ビラつくり」がある。

そしてその「ビラつくり」は、ぼくの日常の中で—（詩をかくときの、あの日常からかけはなれた気分と時間を必要とせずに）—それこそ「詩」を仕上げるような気分をもたらすものだといえる。

もっとも、ぼくの内部では、ビラつくりは例えば〈情景的描写〉のようなものを、全く考えないという一点でだけでも、詩作とはっきりちがっている。

そして、ビラつくりと比べて、詩をかこうとするぼくの方に、むしろ他人のような分裂感を、ときどき持たないものでもない。

7

▼〈詩〉と、〈日常〉あるいは〈運動〉とはちがっていて当り前、かもしれない。

にもか、わらず、いまのぼくにおいて、それがひとつになれへんやろか—。ひとつであってよいではないか、という感じがどこかにある。

そして、〈ビラつくり〉のように、〈詩〉をつくる方法はないものか。ビラをかくように詩をかきたい、というのがぼくのこのごろのねがいだといえる。

（と共に、そのように相隔てた二つのものを、ぼくの中で一しょくたにして、果して〈詩〉ができるか。できたとして、それが詩か。詩だとしても、どれほどの意味をもつか—）

8

▼ともかくそんなあれやこれやのなかで、やっとこさで書いたのが、これらの諸篇。それをわざわざ詩集にまとめたのは—

「エッ、詩集？　そんなの、かなわんワァ」と逃げだすにちがいない—周辺の、ほとんど連日顔をあわせているような若い運動なかまたちに

「どうや、こんなの。ほらあのとき一しょにやった、あのこと書いてみたんや」と、おしつけて、感想をきこうという根胆からだ。

黙殺の可能性も多分にある。が、案外ざっくばらんに、ぼくの中途半端な—つまり〈詩〉であることにつきまとっている、何とない〈いかがわしさ〉、ある種の〈もったいぶり〉〈深刻または軽薄さ〉—（これらを取り去るとほとんど〈詩的〉でなくなるという意味での、ぼくにこびりついている詩的なもの）—が何であるかを、照し出してくれるかもしれない—という期待も捨てられない。

9

▼またそれとは別に、多くの先輩詩人たちが通過した経験にききたい。もちろん、同時代やもっと若い詩人たち、とくに〈コスモス〉のなかまたちにも—

つまり、簡単に云えば、戦前の〈プロレタリア詩〉や、戦後いっときいわれた〈宣伝煽動の詩〉、その他〈人民詩〉とか〈抵抗詩〉と呼ばれるものを、どのように問題とした上で、いまあなたのそのような詩は書かれているのかーである。

それを、できればぼくのこの詩集の感想としてききたいとねがう。

末尾に付して

秋山　清

素朴に形容すれば、向井君の詩は抒情詩である。それも、なるほど、現在のあまりな世相の中に注目されながら、誰も抒情詩だなどと思いもせず言いもせぬ時に、ああ、これは抒情詩であったかとばかりのものである。まさしく現在の中に屹立しながら、そうと誰が理解してるだろうか。

このたびこの詩集の刊行に当って、そういってそれが抒情詩であることに気がついて貰えば、私が改めてペンを採ることはもうないといっていい。「向井の抒情詩」というそのことに、ぼくらの仲間のコスモス同人たちといえどもあまり気がついていないかもしれない。そこで私は、この一言を吹聴すれば役目をおわったといってもいい。